Laurence Campa, *Guillaume Apollinaire*, Gallimard, « Biographies / Gallimard », 2013, 819 p.

森田　いく子

アポリネールの伝記が2013年にガリマール出版社の伝記叢書の一冊に加えられた。彼は第一次世界大戦に参戦し、負傷し、終戦の二日前にスペイン風邪で死亡した。2014年が第一次世界大戦の百周年にあたり、フランス本国では、この戦争の文化を含めた見直しが数多くなされた。また4年後の2018年はアポリネール没後百周年であり、彼の戦争に対する関わり方と戦争中に彼が書いた詩が見直されている。今回の伝記の出版はその延長線上にある。著者のロランス・カンパ氏はすでにアポリネールの伝記を二冊出している。2004年にテクスチュエル出版社から出た多数の写真が盛り込まれた『アポリネール：詩は果てしなく』(ミシェル・デコーダンとの共著)と、2009年にガリマール出版社のデクヴェール叢書から出版されたコンパクトな伝記『アポリネール』である。しかし、今回の伝記は前の二冊と趣きを異にしている。八百ページを越す浩瀚な書であるというだけではない。最大の特徴は伝記がレシの性格を持っていて、時代の様子がまるで小説のように生き生きと描かれ、なぜアポリネールがアヴァンギャルドの象徴的な存在になれたのか、その謎解きをしている感がある。

今回の伝記は、〈詩人の人生〉を追いながら、アポリネールのイマジネーションの世界がどのように形成されていったかを明らかにしようとしている。しかし、これは容易ではない。なぜなら、まず彼の文学の世界は時代と深い関係がある。彼が生きた19世紀末から20世紀始めは経済と科学の急激な発達により、新しい交通・通信手段とマスメディアが次々に生み出された。その結果、社会、政治、文化が大きく変化し、その変化は戦争にまで至った。芸術家や作家、詩人たちは、この変化をある時には享受し、ある時には苦しみ、この時代にふさわしい表現スタイルを見つけようとした。アポリネールもそのうちの一人であるが、彼のイマジネーション形成は、他の多くの芸術家や詩人の活動と深く交差している。アポリネールの活動と想世界に大きな意味を与えた彼らとの交差点をどのように描くかは、彼の伝記を書く際の最も重要な課題であると言っていい。また、彼はつかみどころのない詩人であるとも言われる。確かに、ジャーナリスト、美術・文芸評論家、雑誌の執筆者、編集者、発行者であり、そしてなによりも詩人、というようにいくつもの貌を持っていた。しかし、アポリネールのつかみどころのなさはそれだけではない。彼の言葉は時には矛盾し、一貫していないことすらある。このように多面的でつかみどころのない詩人の像をどのように描けばよいのか。カンパ氏は、回すと様々な紋様を見せるカレイドスコープ

のように複数の視点からアポリネールを描きだしている。そして様々なベクトルが合わさって一つの方向が示されるように、複数の視点の先に詩人の像が浮かび上がってくる。奇妙な言い方に聞こえるかもしれないが、アポリネールの姿は彼だけを追いかけていては見えないのである。そこに数知れない形跡を残したこの詩人を扱う際のむつかしさと面白さがあるように思える。

具体的に紹介したい。彼女は彼の人生を四つの段階に分け、それぞれに一つの大きなテーマを設けている。

まず、〈魔と偶然に導かれて〉と題した第一部ではアポリネールの誕生と幼少年時代が語られる。彼の最初の伝記が1952年にマルセル・アデマによって書かれてから後この六十年の間に、詩人の母方に関する詳細、また母親の生活そのものについて多くが明らかになった。カンパ氏はそれらの資料を踏まえて当時の様子を活写する。読者に直接〈vous〉と語りかけることも彼女は辞さない。今の私たちにとって、詩人がどういった環境で生まれ育ったかが大変イメージしやすいように描かれている。生まれる瞬間から虚実にまみれていた彼は、自分で自伝を作り出す道を選んで詩人アポリネールとなるが、彼の創作の課題の一つは芸術家の、人間の、文化のアイデンティティなのである。

詩人となる第一の契機が彼の出生なら、第二は、ローマで生まれ、地中海沿岸で育った南の男である詩人が、題名の示す通り、運命の魔と偶然に導かれて出会ったヨーロッパ北方の自然、風土、風習、言語である。それらは官能性豊かな詩人の抒情を生み出す要因となった。カンパ氏は外から観察するのではなく、彼がスタヴロ滞在中に書き留めたノートの言葉を追いながら、詩人の内側からリリシズムを捉え、詩人という存在が生まれる源泉を示唆している。アポリネールの人生は流動性と安定性という相反する二本の縄が撚り合わされてできている、とカンパ氏は考える。ジプシーや放浪の旅芸人が彼の詩に何度も現れるが、彼らの自由と独立不羈の精神に憧れながらも彼が切望したのは、詩人として認められることと安定だった。

運命に支配されていた第一部に対して、〈ギヨーム・アポリネールとなる〉と題された第二部では、自分の力で運命を切り開き、筆一本で身を立てていく様子が語られている。作品で言えば、1902年にレヴュ・ブランシュに短編「異端教祖」が初めてギヨーム・アポリネールの名で発表されてから、1909年に『腐りゆく魔術師』が出版されるまでである。この時期、数編の短編や詩、いくつかの評論を雑誌に発表するものの、彼はまだ自分の方向や独自性が決まっていなかった。もし詩人は生まれながらにして詩人であるのではなく、詩人となっていくのだとしたら、何が契機なのか。このことが書かれている。様々な出会いが語られていて、伝記の中で、私が最も惹かれた部分である。今では忘れ去られてしまった詩人たち、クレテイユに芸術家共同体を形成したユマニストの詩人たち、当時まだ無名だった詩人や芸術家たちが、互いに惹かれ合い反撥し合いながら育って行く。アポリネールが往来した文学世界はボヘミアンの世界であり、パリのブルジョアの世界から遠く離れた〈文学と芸術に選ばれし者〉の集まりであった。彼らは好んで民衆文化やマルジナルな文化を吸収しようとする人々であった。カンパ氏は、彼らの交友を、フランス文

学史の中での位置や、アポリネールに与えた影響またその相違を明瞭に示しながら、彼の伝記の背景として描き出すのではなく、彼のイマジネーション形成の磁場として語っている。アポリネールの反リアリスムに基づいた新しいリリシズムは突然出現したのでないことが分かる。

また、私には感動的ですらあるのだが、アパート代も滞るような貧しい生活とパリの文学界の作法を全く知らない一青年がどのように筆一本で暮らしを立てるまでになるのか。アポリネールの焦燥と不安をカンパ氏は描く。1905年、友人たちは本を次々と出してゆくのに対して、彼は安定した職もなく、自分の想念にまだ形を与えることもできず、アニー・プレイダンとの恋には破れ、自分の才能、未来、愛、詩、すべてに自信がなく、焦りが胸のうちに渦巻いていた。そのような時期にポルノグラフィー『一万一千本の鞭』が秘密出版された。これが彼の意に反して彼の最初の本となる。当時のアポリネールの焦燥、暴力、怨念、欲望、ファンタスムがなんの歯止めもなく渦巻き、怒濤のように噴出している様子が語られ、詩の創作が肉体の声と無関係ではないことが分かる。ところが、絵画史を一変する『アヴィニヨンの娘たち』の画家ピカソとマリー・ローランサンに出会って、これらの暗く激しい思いが一挙に光に向かって形を取り始める。この出会いによって詩人は自分の詩学を確信し、フランス詩史の中で重要な位置を占める「振られ男の歌」のプレオリジナル版が書かれるのである、とカンパ氏は語る。

〈偏在〉と題された第三部ではアポリネールの八面六臂の活躍が語られる。アヴァンギャルドという言葉が元は戦争用語であったように、文学芸術の領域においても国籍を異にする作家たちの主導権争いはすさまじいものがあった。その渦の中で、サンボリスム、新古典主義、自然主義、素朴派、ユマニスム、未来派、幻想派、などいかなる派にも属さなかったアポリネールが、どのようにして自分の地位を築き、独立性と個性を保つことができたのか、カンパ氏は三つの要因を挙げている。美術評論家としての確たる位置と『アルコール』の出版、そして同時性論争である。これらによって彼はアヴァンギャルドの騎手たりえた。

1910年、日刊紙アントランシジャン紙で美術欄を担当して、まずアポリネールはサロンの美術評論家として知られるようになる。このことは、アヴァンギャルドの領域で主導権を握る一歩となったという意味でも、筆で自活できる自信がついたという意味でも大きい。主導権と経済的自活は、文学の自由、独立、純粋性を保つのに必須条件である、と彼は思っていた。しかし、この実現は彼の生まれながらの驚くべき受容能力と適応能力、そして優れたバランス感覚によると、何度も伝記作家は指摘する。この能力と感覚が彼と他のアヴァンギャルドの詩人たちとを分ける点でもある。バランス感覚の故に彼はイタリア未来派やダダの詩人たちとは違って、作品に革新とともに伝統を要求したのである。

造形芸術に関しては独学であるにもかかわらず、芸術ジャンルのヒエラルキーや偏見に左右されずに、純粋に、自由に、芸術家を選ぶアポリネールの先見の明と、モデルニテの美的基準を決めてゆく彼の確かな歩みぶりをカンパ氏は示す。今ではその名を不動にした画家たちもその当時は無名あるいは現在のように巨人のような存在ではまだなかった。ピカソ、マチス、ブラックだけでなく、アンリ・ルソー、ロベール・ドローネー、フランシス・ピカビア、マルセル・デュシャ

ン、また、イタリアのジョルジオ・デ・キリコ、ロシアのマルク・シャガールとナタリア・ゴンチャロヴァを最初に取り上げたのは彼であった。後からあれこれ言うのは簡単なのである。彼らを画商に紹介して世に出してゆくアポリネールの姿と、詩人たち、画家たち、画商たちが出会う場所を生き生きと彼女は描いている。

彼は新しい絵画の擁護者であったばかりではない。象徴主義の詩人たちが音楽から詩の秘密を得たように、アポリネールは、絵画と彫刻から、イメージが持つ力を確信し、カリグラムを生み出していった。彼は1912年の『美的省察』の冒頭で、造形に必要な三つの力として、〈純粋、統一、真実〉を掲げているが、この三要素はまた彼の詩学の基礎でもある。この基礎を〈プラスティックの力〉と表現する必然性がカンパ氏の筆致から伝わってくるように思えた。言葉と絵画の線はアポリネールのイマジネーションの中では切り離すことができないのである。

他方、作品においては、1913年に第一詩集『アルコール』が出版された。彼にとっても、また彼を期待する周りの詩人たちにとっても、待ちに待った出版であった。事実、長い熟考の末に、意を決してアポリネールは出版した。なぜ、このように遅くなったのかが詳細に語られていて、副題に〈詩 1898 - 1913〉と付いている理由が読者によく理解される。巻頭詩『地帯』が完成されるまでの経緯、詩集全篇にわたって句読点が校正段階ですべて取り払われた経緯、詩の選択と配列、また出版後の評が簡潔明瞭に語られて、それがこの詩集に対する今までの研究成果のまとめとカンパ氏の解釈にもなっている。

他国の作家や芸術家たちと新しい文学芸術理念の主導権を競い合ったのは、特に同時性論争においてであった。その論争の真っただ中、1913年に、彼は最初のカリグラムである「手紙・大洋」を雑誌『ソワレ・ド・パリ』に掲載した。未来派との論争の中で、彼はすでに『反伝統未来派宣言』を出して、未来派をユーモアで煙に巻いているが、同時性論争では、このように作品で答えたのである。アポリネールの詩の一つの頂点をなすこの作品が生まれてゆく道のりは、この伝記の中でも白眉の語りであろう。カリグラムの同時性が未来派とはまったく異なった道筋からきていることが分かる。

最終部の題名は〈秩序と冒険〉である。1918年に出版された詩集『カリグラム』の最後の詩篇の一行から取られているこのテーマは、アポリネールの終生のテーマであり、第一次世界大戦中においても変わらなかった。第四部における最大の特徴は、カンパ氏の第一次世界大戦の記述方法であろう。この分野における歴史研究の最近の成果を踏まえて、彼が人類史上初めての国家総力を挙げた近代戦に巻き込まれてゆく様子、軍人としての日常生活、砲兵ついで歩兵として彼が辿った行程、彼が兵士として行ったこと、最前線での戦い、頭に砲弾の破片を受けた後どのようにして開頭手術にまで至ったかの過程、そして、どのようにしてフランス国籍を入手したのか、伝記作家は正確に記している。また、戦争中に交わした手紙、それは恋人のルー、マドレーヌ、ローランサンに宛てたものだけでなく、友人たちに宛てたものも含まれるが、これらの書簡と彼の作品から、カンパ氏はアポリネールの戦争に対する考え方の変化も追跡している。この戦争の本当の意味、本当の姿を当時は誰にも予想できなかった。引用されている友人たちとの往復書簡から、

アポリネールの背後には、彼と同じように生死を賭けた多くの詩人と芸術家の存在が感じられる。

伝記作家は詩集『カリグラム』とルーへの詩を何度も引用し、戦場で書くことの意味がアポリネールにとって何であったかを問うている。この詩集の副題が〈平和と戦争の詩 (1913-1916)〉であることの意味が伝わり、状況を反映する詩の即時性にも改めて驚かされる。戦争での生が詩の創作を新しい局面に導いていく。カンパ氏は、ボードレールの「腐った死骸」を引き合いに出して、この不確かな世界では全ては入れ替わりうる、生も死も、すべてはリサイクルされるという。言葉も使う側によってどんな意味にでもなりうることが、戦争のもたらした一つの鍵ではなかったか、と彼女は言う。だから、アポリネールは死をもたらす破壊力を言葉で逸らせて、形、愛、時間、生命を再構築し、言葉で戦争の現実を変身させ、現実と想像の間に言葉の綱を張る。彼女が引用する数々の詩句の中で、状況の言葉が、綱渡りのように見事なアイロニーの舞を見せているのが感じられた。

そして頭部の手術から死まで、パリの文学世界に戻っていったアポリネールの活動の軌跡が描かれている。彼のこの時期での文学活動は表面的には旺盛であった。生活のために新聞のコラムを担当し、『虐殺された詩人』を出版し、『チレジアの乳房』を完成させて上演する。また、彼の存命中には上演されなかったが、『時の色』も書き上げ、小説では未完に終わった『坐る女』を書き、ほかにも色々な作品を構想する。書き出しが戦争の総動員の情景で始まる『ホーエンツォレルン家の白い女』とラスプーチンを扱った『マリコット神父』である。

手術後の身でありながら、このように活発に活動してはいたものの、アポリネールは周囲の文学環境と違和感があった。新しい文学活動を始めていたトリスタン・ツァラ、アンドレ・ブルトン、また従来の友、ジャン・コクトー、ピエール・ルヴェルディ、ブレーズ・サンドラールやキュビスムの画家たちともずれを感じていた。彼らはアポリネールの演劇作品の形式と内容に失望し、常に包帯を頭に巻いて軍服姿で出歩く彼の出で立ちに苛立っていた。アポリネールと彼らとの溝が深まって行く様子が、そしてスペイン風邪に襲われ、ついには死んでしまう過程が、私には『虐殺された詩人』のクロニアマンタルが殺されていく軌跡に重なって見えた。そして、彼らとの間の溝を « les merveilles » をめぐっての微妙だけれども根の深い考えの相違にある、とするカンパ氏の解釈は興味深くて同感する。彼女によれば、アポリネールの世界は、中世の les merveilles の概念と同様に、単なる驚きや感嘆だけではなく、恐怖、驚愕、茫然自失といった人間の力を越える存在や現象で形作られ、魔術に通じる世界なのであって、アポリネールのこの言葉の使い方を周囲は取り違えていたのである。

カンパ氏は黄泉の世界でアキレウスがユリウスに答える言葉を引用して、生きてあることがどんなに光であるかを語る。コストロヴィッキとして生まれ、アポリネールとして生き、今またコストロヴィッキとして死んでいく。『虐殺された詩人』の最後で、ピカソと思われるベナンの鳥が詩人のために墓を作る。それは〈rien の墓〉である。なぜ rien であるのか。「死者を祭るということは、すべてを rien の魂に変えることであり、すなわちすべてを詩に変えるということなのだ」とアポリネールは日記に書いている。詩は vide から生まれる、とカンパ氏は言う。それは、「néant から、また無意味な現実から生まれる」、という意味ではない。「rien の墓とは、vide の

感覚のことであり、記憶や伝説といった非物質的な次元のものだけが持つ感覚の豊穣さや過剰さ」のことなのである、とカンパ氏は考える。これはまた、アポリネールが詩をどのように考えていたのかに対する解釈でもあるだろう。そして、彼女によるアポリネールの伝記はこの rien を彼が体現していることを示そうとしている。

最後にカンパ氏は『虐殺された詩人』の詩人の蘇りの箇所を引用し、コストロヴィッキ家の家系の途絶えを書く。ここに彼の事実としての生が、アポリネールが描く〈詩人の一生〉として完結したように私には思えた。アポリネールの一生は予兆と予言に満ちていて、その逸話は多くある。と同時に、彼が書いたものを彼の生が実現しているようにも思える。ミシェル・デコーダンは『虐殺された詩人』を〈夢見られた自伝〉であると言った。彼の死の二年前に出版されたこの物語は、事実彼の人生の過去の断片と未来の予兆とで成り立っている。だから、伝記作家が引用するアポリネールの作品の言葉は、この伝記の中では、彼の生の予兆であったり、実現であったりする。この伝記は、彼の作品の中の言葉の引用で編まれたアポリネールの人生の再構成である、と言えるかもしれない。そのことがまた、伝記作家による詩人アポリネールとその作品の解釈を示しているのである。

ロラン・バルトとミシェル・フーコーが《作者の死》を言って久しい。しかし 1980 年代に入って次々と伝記が書かれ、伝記や自伝というものに対して新たな考えも生まれた。伝記が基づいている資料は厳密に検証されている一方で、伝記作家は〈作者〉とは何か、その存在を絶えず問い続けている。資料に問いかけるのも伝記作家の言葉によってなのである。もし、〈作者〉は読むという行為の中にしか存在しないとしたら、読んでいる間中カンパ氏の声が終始聞こえていたのもその故であろう。アポリネールという〈詩人の一生〉が一つの声によって、より深く、ダイナミックに語られるようになったことを言祝ぎたいと思う。なお、この書は 2014 年度の Prix de la biographie du Point を受けたことも付記したい。

ロランス・カンパ氏は現在、パリ第 10 大学 (西ナンテール大学) の 20 世紀フランス詩担当の教授であり、アポリネールに関する著書を、上に挙げた伝記だけでなく、十冊余り出版している。そのいくつかを紹介すると、まず、彼女自身の博士論文『アポリネールの文学批評』(オノレ・シャンピオン出版社、2002 年) ではアポリネールが生きた時代の文学状況がパノラマのように鮮明に示され、また、『アポリネールの美学』(セデス出版社、1996 年) では美術批評家としてのアポリネールの存在が歯切れよく解説されている。氏はとりわけ第一次世界大戦におけるアポリネールの創作活動に関して深い関心があり、『第一次世界大戦の詩人たち』(ガルニエ出版社、2010 年) で、アポリネールのみならず、主にブレーズ・サンドラール、アンドレ・サルモンといった同時代の参戦した詩人の創作活動と比較することで、作家が〈戦争の中で書く〉とはどういうことだったのかを問うている。また彼女はアポリネールの書簡の優れた校訂者でもある。『新版マドレーヌへの手紙』(ガリマール出版社、2005 年) や『新版ルーへの手紙』(ガリマール出版社、2010 年) だけではなく、初めて校訂された『芸術家たちとの手紙』(ガリマール出版社、2009 年) では、

彼とやりとりしたほとんどすべての画家、彫刻家、挿絵画家たちの書簡が掲載され、適切な註が施されている。また、雑誌『人文科学』(セプトンテュリオン出版社、2012年)では《アポリネール群島》と題した特集を編集責任者として企画し、今までになかったアプローチを拓いた。例えば、哲学者アンリ・ベルグソンや詩人ルイ・アラゴンとアポリネールとの思想的なつながり、深層心理と精神分析への彼の深い関心に関する研究、音楽理論家による彼の詩の音楽性の研究など。このように見てくると、カンパ氏は現在、アポリネールの伝記を書くのに最も適した研究者と言えるだろう。